

正ちゃんとおかいこ

小川未明

青空文庫

東京とうきょうの町まちの中なかでは、かいこをかう家うちはめつたにありませんので、正ちゃんしょうちゃんには、かいこがめずらしかつたのです。

「かわいいね。ぼくにもおくれよ。」といって、学校がっこうへお友だちともが持もつてきたのを三匹びきもらいました。

そして、だいじにして、紙かみに包つつんで、お家うちへ持もつてかえると、みんなに見みせました。

「あたし、こわいよ。」と、妹いもうとのみつ子がにげだしました。

「私わたしも、はだか虫むしはきらいです。どうしてこんなものをもらつてきたの？」と、お母かあさんがおつしやいました。

正ちゃんしょうちゃんのほかにはだれも、あまりかいこをかわいらしいとい

うものはありませんでした。

「兄にいさん、どつかへ持つていつてよ。」と、妹いもうとがたのみました。

「こんなにおとなしいのに、かわいそうじゃないか。」

しょう

「正ちゃん、おとなしいのではないのよ。しつかり紙かみに包つつんでき

たから、よわったんでしよう。」と、お姉ねえさんがいいました。

「おまえ、くわの葉はがなくてどうするつもり？」と、お母かあさんが

おっしやいました。

くわの葉はは、正しょうちゃんが、もうちやんと野村のむらくんからもらうや

くそくがしてありました。野村のむらくんの家うちはすこしとおかつたけれ

ど、かきねに二本ほんのくわの木きがあつて、それをいくら取とつてもい

いというのでした。

「くわの葉は、もらうやくそくがしてあるんだよ。」

「まあ、手まわしがいいのね。」

「だからお母さん、かってもいいでしょう。」と、正ちゃんは賛成してくれるものがないので、心ぼそくなりました。

「みつ子がこわがるから、はこに入れて、物置の内にでもおおきなさい。」

正ちゃんは、おかしの空きばこをもらって、くわの葉をきざんで入れて、石炭ばこの上の上のせておきました。

晩方、正ちゃんが外からあそんでかえってきてみると、いつしかくわの葉はしおれてしまって、二匹は死んで、あとの一匹だけが、はこのすみにじっとしていました。

「どうして死んだのだろうな。」

正ちゃんは赤いじてん車にのって、死んだかいこを川にながしにいきました。そのかえりに、あたらしいくわの葉をもらってきました。

あくる日のことでした。学校で先生が正ちゃんに、

「きのうのかいこをどうしたか？」と、おききになりました。

正ちゃんは、二匹死んでしまって、いま一匹しか生きていないことを話しました。すると、やさしい先生は、

「一匹ではさびしいな。学校でかっているのをかえりに一匹あげるから、もつておいで。」と、いつてくださいました。

正ちゃんは時間がおわると、先生のところへまいりました。

「さあ、こうして持つていくといい。」

そういつて、先生せんせいは大きくわの葉はの上うえに一匹びきのかいこをのせてくださいました。そのかいこは、正ちゃんしょうの家うちにいるのよりかずっと元気げんきでした。

正ちゃんしょうは葉はの上うえにのせてもらったのをおとさないように、両り手てでささえながら、学校がっこうからお家うちへかえつてきますと、みちをとおる人々ひとびとは、なんだろうと、正ちゃんしょうの手ての中なかをのぞきました。

「あの子こは、かいこをたった一匹びき持つていくよ。」と、わらった子どももあります。

かいこをかつてから、正ちゃんしょうは、毎朝まいあさお母さんかあにおこされ

なくてもほひとりでおきて、じてん車しやにのつて、野村のむらくんのところまでくわの葉はをもらいにいきました。

「あ、また死しんだ。」と、正ちゃんしょうは、物置ものおきでさげびました。

「お母かあさん、あんなくらいとところにおくから死しんだのですよ。」

「じゃ、お座敷ざしきへ持もつてきておおきなさい。」と、お母かあさんはおつしやいました。

「ほんとうにお座敷ざしきでいいの？　しかし、だめだなあ、一匹びきになつてしまったもの。」と、正ちゃんしょうは力ちからをおとしました。

しょう
正ちゃんが心こころからかいこをかわいがっていることがわかつたので、お姉ねえさんもいじらしくなって、

「わたし、蚕糸試験所へいっておねがいして、一匹もらってきけるわ。あそこは、かいこや生糸のことをしらべているお役所だから、かいこがかってあると思うわ。正ちゃんもいっしょにいらっしゃいね。」と、いいました。

二人は電車にのって、かいこをもらいに出かけました。蚕糸試験所の門のところには、金ボタンのついた洋服をきたおじいさんがこしかけていました。お姉さんは、おじいさんの前にいって、ていねいに頭をさげました。

「この子が学校からおかいこをもらってきてかかっていましたが、みんな死にまして、いま一匹だけのこっています。一匹ではお友だちがなくてかわいそうだといえますので、もし、どんなのでも

一匹びきいただけましたらと思おもつて、おねがいにあがりました。」といつて、おたのみいたしました。

金きんボタンの洋よう服ふくをきて、ぼうしをかぶったおじいさんは、

「なるほどな、むりのない話はなしだ。一匹びききりではさびしかろう。ここにすこしのあいだ待まつていらつしやい。」と、いつて、お役やく所よの中なかにはいつていきました。

やがて、おじいさんは、新聞紙しんぶんしにゆるく大おおきく包つつんだものを、だいじそうにもつてきました。

そして、にこにこわらいながら、

「これだけいれば、さびしくはなからうな。」といつて、正しょうちゃんにわたしました。

しょう
「正ちゃんはよろこんで、お姉さんといっしょにあつく、おじいさんにお礼をいって門から出ました。」

「お姉ちゃん、見ようよ。」と、正ちゃんは立ちどまりました。

新聞紙の口をあけると、びっくりするようなぴちぴちとしたのが五匹もはいつていました。

「ぼく、こわいよ。お姉ちゃん、持つていつておくれよ。」と正ちゃんは、手をひっこめました。

「まあ、正ちゃん、このあいだは、かわいらしいといったじゃないの。」と、お姉さんはわらいました。

「だって、あんまり大きくて、元気がよすぎるんだもの。」
「こういうのでなくちゃ、いいまゆをこしらえないのよ。」

「じゃ、ぼく、こわくない！」

「ええ、だいじにしてかかってやりましょうよ。そして、いいまゆをこしらえたら、がっこう学校へ持もつて行って、せんせい先生やみなさんにお見みせなさいね。」と、お姉ねえさんはおっしゃいました。

「そうしたら、ぼく、みんなにうんといばつてやるよ。」と、しょう正ちゃんは勇いさんで歩あるきだしました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「正《しょう》ちゃんとおかいこ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正ちゃんとおかいこ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>